

期待と覚悟が交錯

# 天見地域の 新計画 でききるぞ

市の第5次総合計画の一環で、天見の地域づくりの目標や活動を記した「地域別計画」が策定された。

天見地域まちづくり協議会とは、平成27年2月に設立されたネットワーク組織で、天見地域の実情もふまえながら、住民が力を合せ、様々な地域課題の解決に取り組もうとしている。

5月の定例総会では、①参画団体への支援、②地元産物の販売促進、③天見地域のPRや交流促進、④安全・安心な生活環境の維持といった方針が提案、承認されている。

そのような中で、今回、市からの呼びかけを受けて、天見地域の総合計画を策定すべく、6月から3回に渡り、検討ワークショップが開催された。

ワークショップでは、自然の活用や地域の活性化で若者定住、人口増加をめざす取り組みが検討され、「10年後に向けて本気で動き出す」「自然と生きる奥河内・天見」ちかいまち天見（奥河内）といった意見が出された。

その後、意見や提案をまとめ、10月には、「豊かな自然を身近に体感！夢と活力を未来につなぐまち天見」という将来像が提案されている。

詳しい内容や今後の展開は、市のホームページに公開される予定。この計画に基づいて、市と地域まちづくり協議会が協力して天見を盛り上げていく。

本誌の創刊号で、編集ボランティアを募集したが、応募がなく編集作業に支障が生じている。

## 協力者が不足

参画する清水・上岩瀬・下岩瀬・上天見・下天見・流谷の自治会、福祉や青少年など全29団体の広報担当者の応募に期待したい。

人の話を聞くのが得意な人や、記事を書ける人、カメラ撮影ができる人など。経験不問で募集中。応募はメールで [terunici0822@gmail.com](mailto:terunici0822@gmail.com) まで。



平成27年度の定例総会の様子



ワークショップの様子

# 岩瀬郷と薬師寺

岩瀬地区は、高野街道に面し、中世には、観心寺の所領「観心寺七郷」の一つでした。七郷は、現在の鬼住・鳩原・太井・小深・石見川・上岩瀬・下岩瀬が当たるといわれています。

医王山薬師寺は、千早口駅から北へ約300m、下岩瀬の丘陵の中腹にある融通念仏宗のお寺ですが、創建された時代は、はっきりしていません。薬師寺という名前は、江戸時代の寺請制度のもとで付けられたようです。

寺の本堂に「薬師堂」と刻まれていることから、観心寺文書にある「薬師堂」に結び付ける説があります。

天文4（1535）年、観心寺の堂宇のひとつである薬師堂が再建された際の落慶供養で導師が読み上げる文案に、薬師堂の名が見られます。

この史料では、場所を記していませんが、法要が檀主の母親の二十五回忌という個人的な理由を名目としていることから、本山の規制を受けない遠隔地の堂舎だったことを伺わせます。

また、室町時代の観心寺境内図などに薬師堂の文字がないことから、境内ではなく、伽藍本体から遠く離れたところにあったと推測でき、下岩瀬の薬師寺が、中世の薬師堂に起源をもつのではないかとわれています。

また、明応年間（1492〜150



1年）の戦乱の際に壊されたという記述もあり、戦乱のたびに本尊を避難させてきたことも偲ばれます。

その後、南海高野線の複線工事の際の発掘調査によって、中世の遺跡が発見され、さらに千早口駅東の傾斜地の発掘調査で瓦や仏具類が出土しました。出土品には、火災を受けた痕跡も認められ、戦乱により寺院が失われたことが伺えます。

現在、薬師寺には、本尊の薬師如来立像と脇侍である不動明王立像、毘沙門天立像、眷属である十二神将立像のほか、客仏と考えられる釈迦如来立像、大日如来坐像が安置されています。

元々あった本尊と十二神将立像に加え、周辺の堂宇などが戦火で廃されたとき、その仏像が薬師堂に移されたのではないかと考えられます。

なお、薬師堂は通常、非公開。地元住民により、毎年8月8日の夕方に法要が開帳されています。

# 石造の流谷十三仏

流谷十三仏は、

流谷集会所付近の道路脇に3つに割れた状態で長らく放置されていました。平成6年に修復され、現在、集会所前の小堂に祀られています。



像は、花崗岩でつくられており、高さ約70mの舟形の板碑。正面には十三仏が浮き彫りに彫刻されています。

十三仏とは、仏教において、初七日から三十三回忌までの13回の追善供養の際に本尊とする13体の仏のことで、順に死者を供養すると考えられています。そのような信仰から、生前に自らの死後の冥福を祈る逆修供養の際に建立されるようになりました。

像の側面には、承応2（1653）年10月15日と、信者20名の名が刻まれています。風化や損傷ですべての判読はできませんが、仏教の戒名に混じって、テウロ、シタニなどキリスト教の洗礼名らしきカタカナの名前がみられることから、本像は、キリスト教の供養碑と考えられています。

キリスト教は、天文18（1549）年に長崎に伝来し、織田信長の時代に保護されましたが、その後、豊臣秀吉



の時代には弾圧を受けました。

当時、高槻城の城主である高山右近らがキリスト教だっただけ、河内長野市でも喜多町に所在する烏帽子形城の城主であった甲斐庄正治がキリスト教の信者でした。

フロイスの「日本史」の記述によれば、同城には、約200人の信者がいたとされています。

そのような歴史から、本像は、隠れキリシタンが迫害を避けるために仏教徒に混じって建立し、目立たない側面に洗礼名を刻んだものと考えられ、当市のキリスト教信仰史を考える上でとても興味深い資料です。